九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジッドとアンドレ・ボーニエ

吉井, 亮雄
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/1906127

出版情報 : Stella. 36, pp.255-272, 2017-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

KYUSHU UNIVERSITY

ジッドとアンドレ・ボーニエ

吉　井　亮　雄

主に小説家・文芸評論家として健筆を振るったアンドレ・ボーニエは，ジッドと同じ1869年にノルマンディー地方のウール県エヴルーで生を享けた。90年には名門の高等師範学校に入学，ほぼ同時期に著作活動を開始し，1925年に没するまでプルーストらをはじめ多くの作家・詩人と交わりながら，約40冊の著書を上梓する。小説としては『自我をなくした男』（1911年）が代表作。また評論としては『新しき詩』（1902年）や『今日と昨日の顔』（1911年），『思想と人間』3巻本（1913–1916年）などが同時代の文学状況を活き活きと伝えるが，これらは『ルヴュ・ブルー』誌，次いで『両世界評論』誌（ともに文芸時評），『レコー・ド・パリ』誌（劇評）での連載を纏めたもの。またその他にも『フィガロ』や『パリ評論』『メルキュール・ド・フランス』『ルヴュ・デ・ルヴュ』などの紙誌にも精力的に時評・記事を発表している。

さて，これまでに確認されたジッド＝ボーニエ往復書簡の総数は16通（そのうち全く活字化されていないものは7通）と決して多くはなく，また発信者についてもボーニエのものはわずかに5通と，両者の間でかなりの不均衡を示している。各書簡の記述内容を照合すれば，明らかに未保存ないし未発見のものも多く，実数はおそらくこの倍，あるいはそれ以上だったと推測される。かくのごとく資料体に少なからぬ欠落がある現状では，必然的に両者の関係を総体的に追跡することは難しい。とりあえず本稿では，若干の補説を付しつつ現存書簡を提示・紹介するにとどめたい。

*

書簡の提示・紹介に先立ち，最初期のジッド＝ボーニエの関係について述べておこう。記録に残るかぎりでは両者の交流の開始は1898年初秋のことで，おそらくはジッドが刊行間もないフランシス・ヴィエレ＝グリファンの戯曲『庭

師フォカス』をマルセル・ドルーアン（後出）を介しボーニエに論評させようしたことが発端。しかし理由は定かでないが，掲載を当てにしていた『メルキュール・ド・フランス』誌の主宰アルフレッド・ヴァレットの同意が得られず，計画はいったん頓挫する（結局ボーニエの論考は翌年3月，自身が書評欄を担当していた『ルヴュ・ブルー』誌に掲載される）[1]。この1898年時点で直接の面識があったか否かは不明だが，翌年1月にはボーニエがジッド宅を訪問した模様で，話題は前者が執筆を予定していたエドゥアール・デュコテ主宰の『レルミタージュ』誌（第2期）にかんする論評であった[2]。次いでボーニエは同年2月，アンリ・ド・レニエ，ヴィエレ＝グリファン，そしてジッドにかんする講演を3週連続でおこなう。このうちレニエ論について，ジッドは『レルミタージュ』に連載中の「アンジェルへの手紙」（VIII）で次のような賛辞を記している――「アンドレ・ボーニエはアンリ・ド・レニエにかんする講演のなかで，ギリシャ文学からラテン文学へと移行してゆく過程で，詩がそれまで欠いていた詩的感情というものを諸規則の厳格な遵守に代えたことを巧みに喚起していた」[3] ……。

初期の書簡はジッドのボーニエ宛しか現存が確認されていない。まずは最も古い1899年末の書簡から訳文を示そう――

《書簡1・ジッドのボーニエ宛》

〔パリ，18〕99年11月10日

親愛なるボーニエ

いつお会いできるでしょうか。もっと早くにお手紙を差し上げなかったのは，ご高著を読んでからにしたかったからです。私は南仏に滞在中であり，本はパリにあったのです。妻はご高著を読了後，それを置いたまま私に合流していました。そういう訳で私のところに送らせる手がまったくなかったのです。駅の書店で見つけることができ，ようやく入手したのはヴァランスでのこと。パリに到着するまでご本を手から離すことはありませんでした。そして読書は，なにものにも邪魔されることがないだけに，なおのこと素晴らしいものに思えました。またそれだけにいくつか批判すべき点にも目が届きました。これについては，大いなる称賛にいっそうの興趣を添えるべく，いずれ楽しんであなたに申し上げることにいたしましょう……。それではまた。近いうちに拙宅での昼食においでください。ご都合のよい日をお知らせください。すぐにご返事いたします。私の予定はまださほど詰まってはおりませんので。匆々

アンドレ・ジッド

追伸。ドルーアン氏がラ・フレーシュのプリタネに着任したことをご存じでしょうか。

ジッドが受領を謝すのは，通常 1900 年刊とされるが，実際には前年 11 月中に出来（しゅったい）していたボーニエの『デュポン＝ルテリエ家』のこと[4]。この小説は副題「《事件》期間の一家族の歴史」が謳うように，ドレフュス事件に題材を採った最初期の創作のひとつである[5]。また追伸にあるマルセル・ドルーアンは，1897 年にジッドの妻マドレーヌの実妹ジャンヌを娶り彼の義弟となった早くからの親友だが，この年の新学期プリタネ軍学校に着任，4 年後の 1903 年秋にボルドー高等中学へ転任するまで哲学教授として同校に勤務することになる。

翌 1900 年，ボーニエは『ルヴュ・ブルー』7 月 14 日号の書評欄でジッドの講演テクスト『文学における影響について』に触れているものの[6]，これにかんする両者の記述は残念ながら一切残っていない。それから 3 カ月後のジッド書簡（最近の競売カタログの抜粋）は，『ジュルナル・デ・デバ』紙上に掲載されたボーニエのフランシス・ジャム論を読んだ感想で始まる[7] ——

《書簡 2・ジッドのボーニエ宛》

ラマルー・ル・オー（エロー県）
〔1900 年〕10 月 13 日

〔…〕丸ひと月〔水浴療法のため〕逗留中のこのラマルーに宛てて〔妻が転送してきた『ジュルナル・デ・デバ』紙掲載のフランシス・ジャム論を称賛。同論は〕ジャムにとっても，また我々にとっても実に大きな喜びとなりました。これは完璧な紹介です。論文の掉尾からは，ジャムの「素朴さ（サンプリシテ）」の背後で提示される問題，あえて意図した訳ではないのに彼の像をかくも魅力的で悲壮なものにする問題を，あなたがいかに好く見抜いているのかが分かります。

マルセル・ドルーアンと私は，ヴァカンス最後の日々を費やしてルドルフ・カスナー署名のジョン・キーツ論を訳しました。我々が高く評価している若いドイツ人によるものです。『レルミタージュ』の近日号でお読みになれるでしょう。いくぶん雑然としたところはありますが，大いに興味をもっていただけると思います。——『白色評論』〔の書評欄〕で私の後任に（ゲオンとともに）就いたのがドルーアンだというのは，あなたもご存じのところ。ミシェル・アルノーの筆名を使っています。

パリに寄ったさい，あなたにお会いできなかったのは残念でした。速達を受けて急遽南仏に来ざるをえなかったのです。当地はおそらく長逗留になるでしょう。

いずれまた。敬具

アンドレ・ジッド

ルドルフ・カスナーの名が挙がる書簡後段についても若干の補説を加えておこう。このオーストリア人作家（1873 年生まれ）によるキーツ論は，主としてウィリアム・ブレイクやシェリー，スウィンバーン，ブラウニングら，イギリ

スの詩人・画家を論じた刊出間もない著書『神秘主義，芸術家たち，そして生』の一章[8]。掲載原稿がなかなか集まらない状況が続いていた『レルミタージュ』の主宰デュコテの要請を受けてジッドが翻訳を思い立ったもので（キーツ論を選んだのも彼自身であろう）[9]，ドイツ語に長けた前出のドルーアン（高等師範学校・アグレガシオンに首席合格，観念論哲学の研究のためドイツに留学）がまずフランス語に直し，その訳文を彼が点検するかたちをとった。訳稿は 10 月下旬にデュコテに送られ，時をおかず訳者両名の元に校正刷が届く。こうした経緯をへて，キーツ論は『レルミタージュ』11 月号にジッドの「アンジェルへの手紙」（XIII，最終回）とともに掲載されたのである（ただし訳者名は記されず）[10]。ちなみにカスナーは 4 年後（1904 年），戯曲『ピロクテテス』を翻訳，ライプツィヒのインゼル出版から上梓するが，これはジッド作品最初の外国語訳となる[11]。

続いて 3 週間後に発信されたジッド書簡は部分的な活字化だが，ボーニエが『ルヴュ・ブルー』10 月 20 日号に載せた『アンジェルへの手紙』単行版の書評[12]にたいする礼状。前日到着したマルセイユでようやく掲載号を入手できたとの前置きに続き，次のような文言が記される――

《書簡 3・ジッドのボーニエ宛》

〔マルセイユ，1900 年 11 月 5 日〕

〔…〕この「簡潔さ（サンプリシテ）」への称賛ほど私を感激させるものはないということをご存じでしょうか……。ありがとう。我々がパリにいれば，語り合えますのに。しかし私はすでに遠くに来ていますし，明日は果たしてどこにいるものやら……！〔…〕

ボーニエが「これらの繊細な時評は一貫してジャーナリズム特有の冗漫さ（ネグリジャンス）を免れている。〔…〕かくまでの簡潔さで完璧〔な論述〕に至るとはいかにも見事」と評したことを受けての謝辞であった。

この半年後ジッドは，ロシア通でトルストイとも親交のあったボーニエの新著『ロシアにかんする覚書』（副題「トルストイ，学生たち，ロシア絵画，巡礼行」）について遅ればせながらの賛辞を書き送っている――

《書簡 4・ジッドのボーニエ宛》

〔1901 年 5 月（？）〕

〔『カンダウレス王』初演の準備のため読むのが遅れていたボーニエの新著『ロシアにかんする覚書』を称賛。「トルストイの気高い人物像」について語ったのち，続けて曰

く〕ロシア絵画にかんするご高説は，我々には極めて新鮮な内容です。すでに私はそれを何人かの画家に読ませましたが，彼らがさほど肩をすくめることがなかったのを嬉しく思っています。〔ボーニエに頻繁に会えないことを嘆いたのち〕我々の心を占めている事柄はそれほど異なるものではありません……。最近もあなたは容易には忘れがたいかたちで，すなわち拙作『カンダウレス王』の初演時に退屈な気振など一切見せぬことで，私にたいし強い共感を示してくださったのです。〔続いて，周りの人々にこの戯曲にたいする「関心を幾分なりとも」掻き立てていただきたい，私は「怒り猛るゴーリキー信奉者たちの只中」に身をおいているのです，と〕。

文中で言及される戯曲『カンダウレス王』（全3幕）は，1899年の9月から12月にかけて『レルミタージュ』に3回に分けて掲載されたのち，この1901年3月に序文を付して白色評論社から単行出版された。作品の題材は，いくつかの改変はあるものの，おおむね歴史や伝説が伝える物語，とりわけヘロドトスの記述（『クリオ』第8章以下）から採られている。早くも5月にはリュニエ＝ポーの制作座によって初演されたが（舞台はパリのヌーヴォー・テアートル），ヴィエレ＝グリファン，ロマン・コーリュス，アンリ・ゲオンらが好意的な反応を示したほかは，世評は概して否定的で，劇の「無味乾燥さ，テンポの早さ，拡がりのなさ」を責めるものが多かった[13]。そういう事情があっただけになおのこと，ボーニエの観劇態度はジッドを喜ばせたのであろう。

同年11月，ジッドはリボニアの東洋学者フェドール・ローゼンベルグの誘いを受けてペテルスブルグへの旅行を決断，入念な準備を始めていた。以下は情報収集のために翌年初めボーニエに宛てた手紙の抜粋――

《書簡5・ジッドのボーニエ宛》

〔パリ，1902年1月2日〕

〔…〕ロシアの隅々までご存じのあなたが私に勧めたいことはおありでしょうか。どんな書類を持参すべきでしょうか。シベリア〔の寒さ〕にたいする予防策はありましょうや。トルストイの髪はどこで売っているのでしょうか。〔…〕

文末「トルストイの髪」云々はもちろんジッドの冗談。この10日後，彼は自宅でボーニエと面談し，「ペテルスブルグとモスクワにかんする情報をいくつか」得る[14]。だが同月末，出発予定日の1週間前になって急遽ロシア行きを断念することとなった。理由は詳らかでないが，2月8日の『日記』には次のような記述が残る――「ペテルスブルグに出発しなかったことに別段心残りはないが，

良心の呵責を感ずる。自分自身に与えた約束は他者に与えた約束と同様に神聖なものでなくてはなるまい」[15] ……。なお，同年春にはボーニエに『背徳者』初版（3月20日刷了）を献本したことが過去の競売記録から分かっている。

翌1903年の4月初旬，ジッドは，依然としてピレネーの小邑オルテーズを離れぬ詩人ジャムの知名度を上げるべく，メルキュールから出版間近の小説『野兎物語』を論評するようボーニエに面談のうえ依頼する。多くの作家や画家・音楽家と交流のあった文人肌の官僚アルチュール・フォンテーヌと語らったうえでの依頼であった[16]。ジャムにはこの計画を知らせぬこと，あくまで自発的な執筆の体裁がとれることを条件にボーニエは快諾する（実際にはジッドはジャムに事の委細を知らせ，それなりの対応をするよう求めている）[17]。『野兎物語』の刊出予定は同月21日だったが，ボーニエ側の都合もあって書評の掲載は1週間後ということに決まった（以下が現存の確認された最も古い時期のボーニエ書簡）――

《書簡6・ボーニエのジッド宛》

〔パリ，1903年4月12日頃〕
ル・フィガロ／ドゥルオ通り20番地

親愛なる友

承知しました。4月28日の『ジュルナル・デ・デバ』紙の最下欄記事（レ・ド・ショセ）で散文作家としてのジャムについて論じましょう。本ができるだけ早く私の元に送られるよう，どうかよろしくお取り計らいください。場合によっては校正刷をお届けいただくことは可能でしょうか。匆々

アンドレ・ボーニエ

書評者の求めに応じて校正刷が事前に届けられ，「フランシスコ会修道士のごとき」と題されたジャム論は書簡の予告通り『ジュルナル・デ・デバ』紙（ただし4月28日号ではなく翌日号）の第1面最下段（6段分）を飾った[18]。

以後7年近くは，ジッドの北アフリカ旅行記『アミンタス』の自筆献辞入り初版（1906年3月出版）が確認される以外には（少なくともボーニエからの礼状は存在したはずだが），両者の交流を伝えるめぼしい資料は残っていない。

次いで存在が確認された書簡は，『新フランス評論』周辺に位置するグループの中心的存在だったシャルル＝ルイ・フィリップの早逝（1909年12月21日）に関連するものである。極貧家庭に生まれたこの詩人・小説家は常に社会の底辺に暮らす人々に温かい目を注ぎ，それゆえに多くの仲間たちから愛されてい

た。死去の翌年,『新フランス評論』の主要メンバーらは彼の胸像を故郷のアリエ県セリイに建立すべく奔走することになるが（そのさいジッドは記念の講演をおこなう[19]），これに先立ちボーニエは早くもフィリップ死去の翌日,『フィガロ』に追悼論文を発表していた[20]。それを謝してジッドの曰く――

《書簡 7・ジッドのボーニエ宛》

〔パリ，1909 年 12 月 26 日〕

親愛なるボーニエ

昨日セリイでフィリップ夫人に，今は亡き我らの友についてのご高論を読んで聞かせることができました。

あなたは美しい論文を物し善行を施された。おそらく元日号で彼の最後の作品を興味をもってお読みになることでしょう。亡くなるほんの少し前に彼が『新フランス評論』にと持参してきた作品です。この雑誌をあなたに寄贈するよう指示を出しました。ドルーアンや私自身にたいし少しでも注目してくださるならば，必ずや関心をもっていただけるはずです。というのも，我々はほとんど毎号に寄稿し，友人たち数人とともに，この雑誌においては，何と言いましょうか，端正さといったものを保つよう大いに努力しております。しかし，お送りする各号が『フィガロ』経由で紛れてしまい，お手元には届かぬのではないかと大変怖れています。とまれ，〔未着の場合は〕次号をご請求いただき，フィリップの遺作『シャルル・ブランシャール』をお読みください。敬具

アンドレ・ジッド

小型版で少部数刷った拙著をお送りしておりましたが，それもまたお手元に届かなかったのではないかと大いに危惧しております。

ジッドが述べるとおり，フィリップの遺作『シャルル・ブランシャール』は『新フランス評論』の元日号と 2 月 1 日号，15 日号に連載される。とりわけ 2 月 15 日号は毎月 1 日発行の通常号とは別枠での「フィリップ特集号」として組まれた（同誌としては初めての追悼特集号）。シャルル・ゲランによる故人の肖像画が巻頭を飾り，クローデルやミシェル・アルノー（ドルーアン），アンナ・ド・ノアイユ，マルセル・レイ，マルグリット・オードゥー，エミール・ギヨーマンらが亡き友を偲んで寄稿している（またこの 3 年後には『シャルル・ブランシャール』は新フランス評論出版から，レオン＝ポール・ファルグの序文を付して単行出版されることになる）。ボーニエは雑誌連載開始を受けて早くも 1 月 8 日の『フィガロ』で同作を紹介している[21]。そこにはすでに物語全体の筋立が示されていることから見て，ジッドまたはその周辺に事前情報を求めていた

可能性が高い。なお，書簡の追伸が触れる「少部数小型版」とは，6 月 12 日に印刷が完了し，その後間もなくメルキュール・ド・フランスから出来していた『狭き門』初版（16 折アルシュ紙使用 300 部限定）のこと。ネルヴァル訳『ファウスト』第 2 版（1835 年刊）を模した青色表紙の所謂「プチット・コレクシオン・ブルー」の一冊である（ちなみに 12 折の普及版も初版の 8 日後には刷り上がり，メルキュールの読者にはお馴染みの黄色の表紙を纏って刊出している）。

次のジッド書簡は翌年 5 月に送信されたものだが，具体的な内容については残念ながら未詳である。委細は今後の調査・探索に委ねたい――

《書簡 8・ジッドのボーニエ宛》

〔パリ，1910 年 5 月 20 日〕

〔…〕私の手紙はおそらく怒気を含んではいても，決してあなたを非難するものではありません。その目的はただ，あなたは私にかなりの迷惑を与えるこの不当行為とは無関係だと明言することなのです。事情が分かった今や，私は心穏やかに〔メルキュール・ド・フランス社主〕ヴァレットのなすがままにさせておくことができます。〔…〕

翌 1911 年 10 月にはジッドはボーニエに『書簡集から見たドストエフスキー』（ウージェーヌ・フィギエール社刊）を贈っている。自筆献辞は「アンドレ・ボーニエに / A. G.」という何とも素っ気ないものだが，筆者がこれまでに確認したかぎりではオクターヴ・ミルボー宛など，いくつかの献本の場合もまったく同様であった。

さて以下の 4 通は，1914 年の 1 月号から 4 月号にかけて『新フランス評論』に連載されたジッドの『法王庁の抜け穴』をめぐる遣り取りである。まずは単行出版を機に同作を論じようとするボーニエからの書簡――

《書簡 9・ボーニエのジッド宛》

ラ・プリーズ・ドー大通り 20 番地
ル・ヴェジネ（セーヌ＝エ＝オワーズ県）
1914 年 5 月 10 日

親愛なるジッド

『新フランス評論』で『法王庁の抜け穴』を拝読したとろです。『両世界評論』で私が担当する次回のコラム（6 月 1 日号）でご高著を論じたく存じます。ご高著が確かにその日までに出版されるか否かをお知らせいただければ幸いです。

また私の企図のために貴作品すべてを読み返していますが，『アンドレ・ワルテルの手記』と『詩』が欠けています。この 2 冊がすでに絶版だとは承知していますが，お

手持ちのものを――1週間だけで結構です――お貸しいただけないでしょうか。注意ぶかく取り扱い，必ずお返しいたします。御手を握ります。

アンドレ・ボーニエ

『アンドレ・ワルテルの手記』と『詩』はモンセー通り4番地にお送りいただけるでしょうか。明晩はそこにおりますし，〔12日〕火曜の日中にも立ち寄ります。ご迷惑をおかけし申し訳ありません。

なお，追伸にある『アンドレ・ワルテル』の貸与（むしろ寄贈であったろう）におそらくは関連して，正確な日付は不詳ながら（同年5月か）ボーニエ夫人に宛てたジッド書簡2通の存在が確認されている[22)]。

6月末ないし7月初めにジッドが送った書簡は見つかっていないが，まず間違いなくボーニエによる『法王庁の抜け穴』論の進捗・出来予定を尋ねたものであろう。次が後者からの返信――

《書簡10・ボーニエのジッド宛》

ラ・プリーズ・ドー大通り20番地
ル・ヴェジネ（セーヌ＝エ＝オワーズ県）
1914年7月8日

親愛なるジッド

お返事が遅れました。お赦しください。

私が4月と5月に2度カセット通りに赴いたと思し召せ。あなたの小説は5月に出るとはっきり言われました。『両世界評論』の私のコラムは月に1回だけの掲載です。〔したがって〕思いどおりに上手く段取りをつけるのは簡単ではありません。ご高著には6月1日のコラムを当てていましたが，5月20日頃に出版はまだだと知り，予定を切り替えざるをえなかったのです。しかしながら結局のところ，遅延が生じないかぎり，ご高著には9月1日のコラムを予定しています。

というわけで，私があなたの著作群を評価していないとお思いになられたのでしょうか。私には理解ができません。数多の友情を込めて

アンドレ・ボーニエ

ボーニエが2度出向いたパリ6区のカセット通りとは明らかに，一本筋違いで当時『新フランス評論』の事務所があったマダム通り（35–37番地）との混同。また『法王庁の抜け穴』の単行書については，2巻本限定初版の刷了が4月15日と25日，普及版のそれは5月15日（ただし大型紙刷りは同月12日）。このうち初版は『新フランス評論』5月1日号で同月10日出来予定と打たれ，じじつ翌月1日号の裏表紙には「刊出済み」（その後間もなく完売）とあることか

ら，書簡の記述が指しているのは6月末か7月に入ってから出来した普及版のことと思われる。書評の対象としても広く一般読者の手にわたる普及版であったと考えるのが自然であろう。

上掲書簡を7月10日に受け取ったジッドは，下書きで入念に文章を練った返信を翌々日に妻所有の地所キュヴェルヴィルから送っている――

《書簡11・ジッドのボーニエ宛》

キュヴェルヴィル＝アン＝コー
〔1914年〕7月12日

では，私も辛抱強く待つことにいたします。お手紙をくださってよかった。というのも，私はすでにあなたが執筆をお止めになったのだと思いはじめていたからです。

しかしご高論の発表が遅れたのを利用して，私が『抜け穴』用に書き，校正で削除した序文のことをお知らせしましょう。

私はその序文のなかで読者に『法王庁の抜け穴』は15年以上私の頭のなかにあったことを語りました。また『狭き門』は15年近く，そして最初に出した『背徳者』はそれよりもほんの僅かに短い期間にわたり私の頭のなかにあったことも。

それらのテーマはすべて並行的に，競い合って発展したものです。――だから，ひとつの作品を他の作品よりも前に書いたとしても，それはそのテーマが，イギリス人のいうように，より《手近に（アット・ハンド）》あるように思えたからにほかなりません。もしできるものならば私はそれらを一緒に書いたでしょう。『狭き門』も書くのだと分かっていなかったならば，おそらく『背徳者』を書くことはできなかったでしょう。そして『抜け穴』を書くためには，この両方をすでに書いている必要があったのです。

これから先の作品を書くためには『抜け穴』を書いている必要があるように。

なぜ私はこの作品を《茶番（ソチ）》と呼んだのでしょう。なぜその前に出た他の3つの作品を《物語（レシ）》と呼んだのでしょう。それはこれらが《小説（ロマン）》ではないことをはっきりさせるためです。そして私は序文を次の言葉で結びました。《茶番》にせよ《物語》にせよ，私はこれまで《皮肉な（イロニック）》作品――あるいはお望みとあらば批判的（クリティック）な作品と言ってもいい――しか書かなかった。おそらくはこの作品がその最後のものとなるだろう，と。

それから私はこの序文を削除しました。読者がこうした打ち明け話を聞いたところで仕方あるまいと思ったからです。しかし批評家はおそらく…… そういう訳であなたに書いているのです。――しかし結局のところ，それを問題にするしないはあなたのご自由です。もしこれがご高論の妨げになるようであれば，まったく知らなかったものと思し召せ。敬具

自作にかんするジッド独特の分類については，ほぼ同じ見解が前年8月29日付のジャック・コポー宛書簡に記されている。同書簡はジッドが述べるように，

初版や普及版など生前の各版では削除されるが，作家の没後編まれたプレイアッド旧版『作品集』（1958 年）では «Lettre-préface» のかたちで作品冒頭に置かれ，2009 年刊の新版では参考資料のひとつとして採録されている[23]。

かなり長めのボーニエの書評（題名は「『パリュード』の著者」）は予告よりもひと月遅れて『両世界評論』10 月 1 日号に掲載されるが[24]，ジッドがこれを読み知ったのは翌月に入ってからであった――

《書簡 12・ジッドのボーニエ宛》

キュヴェルヴィル，〔1914 年〕11 月 10 日

パリ〔の宛先〕：ロージエ通り 44 番地，ヴァン・リセルベルグ氏方

親愛なるボーニエ

おそらく私のことを死んでしまったか，なお悪いことには，恩知らずだと思われたことでしょう。たまたま先日，オデオンを下っていて，あなたの論文を見つけました。たしかにあなたの親切な約束を忘れてはおりませんでしたが，論文は〔戦争勃発による〕トンネルから脱けるのを待って執筆しようとされている，そう思っていたのです。パリではひどく多忙だったために，お礼を申しあげられませんでした。2 日間の予定でキュヴェルヴィルにおりますが（避難民を連れてきたのです），この機会を利用して手紙を差し上げています。しかしパリに戻れば，お目にかかれるでしょうか。色々お話ししたく存じます。

ご高論は私について書かれた最上のもののひとつですが，現今，これを読む者はひどく少ないのではないか，戦争以外には関心を払わぬ者たちばかりではないか（私も同様ですが），そうであるとすれば些か心が痛みます。ご高論が一書に収まり再び人の目に触れるよう，どうか希望を持たせていただきたく。

日をあらため別の機会に，ご高論のどこに私が感動しているかを時間をかけてお話ししたいと存じます。私はとりわけその一節に，歓喜とまでは言わぬまでも，書く楽しみ以上のものを覚えたのです。

嗚呼！ 今日はご高論を読んだ喜びを，ほとんど恥ずかしさを覚えながら告白しています。そして私は『両世界評論』のこの号を友人らに見せることはせず，逆に隠してしまいました。身を隠すようにして便りを差し上げているのです。近いうちにあなたとお会いしたいのは，文学とはまったく別の話題についてお話しするためです。今や私のすべての時間と心を占める「フランス＝ベルギーの家（フォワイエ・フランコ＝ベルジュ）」の活動についてです。いつ，どこでならば，あなたにお会いできそうか，近日中に『フィガロ』に電話してお尋ねします。さようなら。敬具

アンドレ・ジッド

書簡が触れる抗独戦争とベルギー避難民の救援活動について一言――。9 月 5 日，シャルル・ベギーがヴィルロワ近郊の前線で戦死，同月 22 日にはアラン＝

フルニエがサン＝レミ＝ラ＝カロンヌでの戦闘でこの世を去った。翌月 10 日にキュヴェルヴィルからパリに戻ったジッドは，ベルギーおよび北フランスからの避難民への対応に憤慨し，シャルル・デュ・ボスとともに彼らの救援組織「フランス＝ベルギーの家」の設立を決意（ベルギーのデル・マルモル男爵を会長とし，ジッド，デュ・ボス両名が副会長に就いた），その後 1 年半にわたってこの活動に従事・専念することになる。

次の書簡も《書簡 8 》と同様，明確な関連情報が見当たらず，具体的な内容は不詳とせざるをえない。ただ前段については，「戦争の唯一のメリットたる心の連帯」，英仏間の堅固な関係を強調する 11 月 15 日付ジッド宛エドマンド・ゴス書簡のことを指しているのかも知れない[25]。また後段の記述がベルギー避難民救援活動の一環であることだけは間違いあるまい――

《書簡 13・ボーニエのジッド宛》

〔パリ 9 区〕モンセー通り 4 番地
1914 年 11 月 23 日

親愛なる友

ゴスは魅力的です。彼のかくも美しく，かくも優しい手紙を読ませていただき，有難うございます。荒々しい時代にあってさえも，なんと彼は親切なことでしょう！

あなたのベルギー人を首尾よく郵政省に押し込むことができれば好いのですが，確信はもてません。しかし最善を尽くす所存です。匆々

アンドレ・ボーニエ

年が明けても依然として厳しい状況が続くなか，ジッドがベルギーの代表的詩人エミール・ヴェラーレンにかんしボーニエに宛てた次のような書簡が残っている――

《書簡 14・ジッドのボーニエ宛》

〔パリ，1915 年〕7 月 2 日

親愛なるボーニエ

お電話しようとしましたが，上手くゆきませんでした。同封のメモの件でお話ししたかったのです。しかしおそらくこのメモだけで十分でしょう。結局のところ，私が期待したいのはご寄付ではなく，あなたが愛しておられるのを私も承知のヴェラーレンについて――『血まみれのベルギー』についてです――『フィガロ』に記事を書いていただくことです。記事では付随的に寄付〔の呼びかけ〕に，あるいは少なくとも（というのも，私が思うに『フィガロ』は資金援助への要請を載せるのは好まぬので）〔テオ・ヴァン・リセルベルグによるヴェラーレンの〕肖像画には触れていただけましょう。

多忙を極めており，本件について思うような言葉でではなく，ただ簡略かつ誠実に申しあげるほかありませんが，畢竟するにその方がよろしいのではないかと。匆々

アンドレ・ジッド

新フランス評論出版から出来して間もないヴェラーレンの『血まみれのベルギー』は，前年8月のドイツ軍ベルギー侵攻を機に綴られたエッセイ集だが，ジッドが書簡と同封のメモ（未保存）で言わんとするところは，7月17日の『フィガロ』紙に載ったボーニエの論考から十分に推測がつく。ボーニエは「フランドルの詩人」を称える同論を次のような一節で始めているからだ――「ヴェラーレンの友人たちは，我らが姉妹国ベルギーの栄光のひとつたるこの大詩人を称えることを決めた。〔…〕『騒擾の力』の著者の肖像画，画家テオ・ヴァン・リセルベルグが完成したばかりの見事で思索にあふれた肖像画が，仏白両国が共に苦しみ，協力し，勝利をおさめたこの歳月を記念してルクセンブルク美術館に寄贈されるであろう」[26]。実際，この記述ばかりか，短い文言ながら「ヴェラーレンの肖像画を買うためにできることは何でもします」[27] という同月4日付のジッド宛コポー書簡の追伸からも明らかなように，『新フランス評論』グループはヴェラレーンの肖像画を依頼したヴァン・リセルベルグへの画料を捻出すべく拠金を求めていたのであり，ボーニエの論考によってヴェラーレンの新作刊出と，著者を称える計画とが一般にも広く知られることを願ったのである。なお付言すれば，画家はこの年，ヴェラーレンの肖像画を計5枚描き（油彩4枚，クロッキー1枚），そのうち5月完成の油彩1枚が計画どおりルクセンブルグ美術館に寄贈されている[28]。ボーニエの論考は間もなく発表され，それにたいするジッドの礼状の存在が確認されている。具体的な記述内容は未詳だが，備忘としてこの書簡も立項しておこう――

《書簡15・ジッドのボーニエ宛》

〔パリ，1915年7月18日頃〕

〔『フィガロ』7月17日号に掲載されたボーニエのヴェラーレン論「フランドルの詩人」にたいする礼状〕

現存が確認された最後の書簡は，ジッドが完成したばかりの『田園交響楽』の初出に関係するもの。彼は「仮に〔『両世界評論』〕が望むのであれば」[29] 同誌に新作を掲載しようと考え，ボーニエにその仲介を求めていたのである――

《書簡 16・ボーニエのジッド宛》

ル・ヴェジネ（セーヌ＝エ＝オワーズ県）
ラ・プリーズ・ドー大通り 20 番地
1918 年 11 月 19 日

親愛なるジッド

話し合う必要があるでしょう……。あなたがお望みのように，また私もそう望むように，あなたのお役に立とうと努めながらも，お役には立てぬと申しあげることになりましょう。

お信じください。最も好いのは，あなたが『〔両世界〕評論』の編集長に会いに行かれることです。彼はあなたのことを大変よく知っています。お疑いなさるな。

次にパリにお出でのさいは，一言お知らせください。私がお役に立たない理由をお話します。遺憾ながら，そのことはあなたも見当がついておいでのところ。

しかし，ためらうことなくこの方策をお進めください。あの家〔『両世界評論』〕は決して突っ慳貪ではありません。匆々

アンドレ・ボーニエ

ボーニエが自ら仲介の労を取るのを嫌った理由は定かでないが，この試みは実を結ぶことなく終わる。その経緯はおおむね以下のごとし――。同年の大晦日，ジッドはデュ・ボス宅で「〔牧師の〕第 2 の手帖」を読むが，これに先立つ 12 月初旬にはパリ 16 区ジョルジュ・ヴィル通りのジャンヌ・ミュールフェルト夫人のサロンで作品全体を朗読していた。その場に立ち会った聴衆のひとりアンナ・ド・ノアイユが仲立ちを努めることになり，『両世界評論』の編集長ルネ・ドゥーミックに作品の掲載を打診したが，ドゥーミックは同誌にプロテスタントの読者が多いことを理由にこの申し出を断るのである（結果的に以後もジッドが同誌に寄稿することは一度もない）。その後，今度はミュールフェルト夫人が『パリ評論』の編集長マルセル・プレヴォーに話を持ち込むが，ここでもまた同様の理由で拒否される[30]。最終的に『田園交響楽』は，かなり間をおいた翌年 11 月から 12 月にかけて『新フランス評論』に連載され，そのしばらく後に単行出版の運びとなるのである。

これ以降の交流はほとんど記録がない。1922 年 6 月にジッドの『サウル』（ジャック・コポー演出）がヴィユー＝コロンビエ座で初演されたさいに，ボーニエが『レコー・ド・パリ』に載せた短い劇評がほとんど唯一の例外と言ってよいほどである[31]。しかしながら，すでに本稿冒頭で述べたように，現存の往復書簡に欠落が多いと推測される以上，その一事をもって両者の関係の希薄化

を結論づけるのは控えねばなるまい。今後新資料が発掘されることを期待しつつ，本稿はこれをもってひとまず擱筆としたい。

註

1）Voir la lettre de Gide à Marcel Drouin［*ca* 13 septembre 1898］, *La NRF*, n° 560, janvier 2002, p. 26 ; André Beaunier, «*Phocas le Jardinier*, par Francis Vielé-Griffin», *Revue Bleue* du 4 mars 1899, pp. 279-282. ちなみに，この書評は若干の修正を施したうえで他のグリファン論とともに，1902 年ボーニエの著書『新しき詩』に収められる（voir Beaunier, *La Poésie nouvelle*, Paris : Mercure de France, 1902, pp. 239-276）。

2）Voir la lettre de Gide à Francis Vielé-Griffin［janvier 1899］, dans André Gide, *Correspondance avec Francis Vielé-Griffin (1891-1931)*. Édition établie, présentée et annotée par Henry de Paysac, Lyon : Presses Universitaires de Lyon, 1986, p. 19. 結果的にボーニエの『レルミタージュ』論は発表されず，同誌に言及した数行が上掲『庭師フォカス』の書評末尾に置かれるにとどまった。

3）Voir André Gide, «Lettre à Angèle（VIII）», *L'Ermitage*, juin 1899, p. 460.

4）André Beaunier, *Les Dupont-Leterrier (Histoire d'une Famille pendant l'Affaire)*, Paris : Société libre d'édition des Gens de Lettres, 1900. 同著が 1899 年内に出来していたことは，たとえば『白色評論』1899 年 12 月号（第 480 頁）にその書評が掲載されていることからも明らかである。

5）Voir Cécile Delhorbe, *L'Affaire Dreyfus et les écrivains français*, Paris : Éd. Victor Attinger, 1932, pp. 304-312.

6）Voir André Beaunier, «*De l'Influence en littérature*, par André Gide», *Revue Bleue* du 14 juillet 1900［rubrique «Mouvement littéraire»］, pp. 62-63.

7）Voir André Beaunier, «Francis Jammes», *Journal des Débats* du 7 octobre 1900, p. 3, col. 1-3. ちなみにこの記事をキュヴェルヴィルからジッドに送ったマドレーヌは彼への手紙になかで次のように書いている――「今朝の『デバ』紙に載ったボーニエのこのジャム論を送ります。とても親切で，とてもボーニエ的〔な論考です〕」（10 月 7 日付未刊書簡，カトリーヌ・ジッド女史旧蔵文書）。さらに付言すれば，次に掲げる《書簡 2》は 2015 年 6 月パリでの競売（ピエール・ベルジェ主催）に出品されたものだが，カタログ作成者は年号を 1899 年と誤って補っている。またここで言及される論考は，その後若干の修正を施されて，ボーニエの評論集『新しき詩』のなかの新たなジャム論の冒頭部として再録される（voir Beaunier, *La Poésie nouvelle*, *op. cit.*, pp. 333-356）。

8）Voir Rudolf Kassner, *Die Mystik, die Künstler und das Leben. Über englische*

Dichter und Maler im 19. Jahrhundert. Accorde, Leipzig : E. Diederichs, 1900, pp. 95-115（« John Keats »）.

9）Voir André Gide - Édouard Ducoté, *Correspondance (1895-1921)*. Édition établie, présentée et annotée par Pierre Lachasse, Tupin-et-Semons : Centre d'Études Gidiennes, 2002, p. 205（lettre de Ducoté, du 17 octobre 1900）. またジッドがキーツに強い愛着を抱いていたこと示す一例として，1898 年 3 月，ローマにある詩人の墓を訪れていることを想起しよう（講演テクスト『文学における影響について』のなかにその時彼が抱いた感慨の反映が認められる）。

10）Voir « John Keats, par Rudolf Kassner », *L'Ermitage*, novembre 1900, pp. 329-355（traducteurs non signés）; André Gide, « Lettre à Angèle（XIII）», *ibid*., pp. 387-393. ちなみに「アンジェルへの手紙」最終回は，当時大きな反響を呼んでいた川上音二郎・貞奴の舞台公演（ロイ・フラー座）に触れている。

11）Voir André Gide, *Philoktet oder der Traktat von den drei Arten der Tugend*. In Deutscher Umdichtung von Rudolf Kassner, Leipzig : Insel Verlag, 1904.

12）Voir André Beaunier, « *Lettres à Angèle*, par André Gide », *Revue Bleue* du 20 octobre 1900［rubrique « Mouvement littéraire »］, pp. 509-510.

13）Voir la « Préface pour la seconde édition du *Roi Candaule* », dans André Gide, *Saül. Le Roi Candaule*, Paris : Mercure de France, 1904, pp. 148-152.

14）さらに 2 日後には訪問者の印象を『日記』に短く記している――「ボーニエ。彼の微笑，彼の笑いは，一言いっては相手に詫びるといったふうだ。彼は私が知っているなかで最も他人に気兼ねする人物だ」（André Gide, *Journal, I (1887-1925)*. Édition établie, présentée et annotée par Éric Marty, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1996, pp. 322-323）。

15）*Ibid*., p. 344.

16）1903 年 4 月 12 日頃のジッド宛フォンテーヌ書簡（個人蔵，未刊）の情報による。

17）Voir *Correspondance André Gide - Francis Jammes (1893-1938)*. Édition établie et annotée par Pierre Lachasse et Pierre Masson. Introduction par Pierre Lachasse, 2 vol., Paris : Gallimard, *Cahiers André Gide 21-22*, 2014-2015, t. II, pp. 149-153,

18）Voir André Beaunier, « Une sorte de franciscain », *Journal des Débats* du 29 avril 1903, p. 1, col. 1-6.

19）この講演「シャルル＝ルイ・フィリップ」は 11 月 5 日にサロン・ドートンヌでおこなわれ，そのテクストは雑誌『ラ・グランド・ルヴュ』12 月 10 日号に初出，ついて翌春にウージェーヌ・フィギエール社から同題名の冊子体で出版された。

20）Voir André Beaunier, « Charles-Louis Philippe », *Le Figaro* du 22 décembre 1909, p. 2, col. 5-6 ; repris dans son livre *Visages d'hier et d'aujourd'hui*, 1911, pp. 128-141.

21）Voir André Beaunier, « Charles Blanchard », *Le Figaro* du 8 janvier 1910［ru-

brique « À travers les Revues »], p. 3, col. 1-3.

22) Extrait de catalogue de vente publique (repris dans le *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 60, octobre 1983, p. 569) : « 2 l.a.s., à Mme André Beaunier, reliées dans un ex. sur Japon des *Cahiers d'André Walter* (première éd. de l'Art Indépendant, 1891). À propos de l'éd. des *Cahiers d'André Walter* à l'Art Indépendant ».

23) Voir André GIDE, *Romans, récits et soties. Œivres lyriques*, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1958, p. 679 ; *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, 2 vol., Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2009, t. I, « [Lettre dédicatoire] À Jacques Copeau », pp. 1195-1196.

24) Voir André BEAUNIER, « L'auteur de *Paludes* », *Revue des Deux Mondes* du 1er octobre 1914, pp. 360-371 ; repris dans son livre *Les idées et les Hommes*. Deuxième série, Paris : Plon-Nourrit et Cie, 1915, pp. 221-236.

25) Voir *The Correspondence of André GIDE and Edmund GOSSE (1904-1928)*. Edited by Linette F. BRUGMANS, New York : New York University, 1959, p. 115.

26) André BEAUNIER, « Le Poète des Flandres », *Le Figaro* du 17 juillet 1915, p. 1, col. 1.

27) *Correspondance André GIDE - Jacques COPEAU (1902-1949)*. Édition établie et annotée par Jean CLAUDE. Introduction de Claude SICARD, 2 vol., Paris : Gallimard, *Cahiers André Gide 12-13*, 1987-1988, t. II, p. 101 (lettre du 14 juillet 1915).

28) 次のカタログ・レゾネを参照—— Ronald FELTKAMP, *Théo Van Rysselberghe, 1862-1926*, Bruxelles : Éd. Racine / Paris : Les Éd. de l'Amateur, 2003, p. 409 [cote 1915-006]. ちなみにこの肖像画はその後パリのドリュエ画廊を経て，現在はオルセー美術館に収蔵されている。

29) *Correspondance André GIDE - Dorothy BUSSY (1918-1951)*. Édition établie par Jean LAMBERT. Notes de Richard TEDESCHI, 3 vol., Paris : Gallimard, *Cahiers André Gide 9-11*, 1979-1982, t. I, p. 101 (lettre du 19 novembre 1918).

30) Pour le détail, voir l'édition critique de *La Symphonie pastorale*, établie par Claude MARTIN, Paris : Lettres modernes Minard, 1970, pp. XVI et 154-164.

31) André BEAUNIER, « Le Poète des Flandres », *L'Écho de Paris* du 17 juin 1922, p. 5, col. 1.

* * *

ジッド＝ボーニエ往復書簡一覧（書き手・日付／発信地／レフェランス）

1.	G = 10.11.1899	Paris	CG 00323.
2.	G = 13.10.1900	Lamalou	Cat. vente 25 juin 2015, item n° 198.
3.	G = 05.11.1900	Marseille	*BAAG*, n° 110/111, p. 289.

4.	G = 00.05 (?).1901	S. l.	*BAAG*, n° 60, p. 570.
5.	G = 02.01.1902	Paris	Cat. vente 17 décembre 2001, item n° 157.
6.	B = *ca* 12.04.1903	Paris	BLJD *γ* 32.3.
7.	G = 26.12.1909	Paris	CG 00322.
8.	G = 20.05.1910	Paris	*BAAG*, n° 60, pp. 569-570.
9.	B = 10.05.1914	Le Véginet	BLJD *γ* 32.6.
10.	B = 08.07.1914	Le Véginet	BLJD *γ* 32.4.
11.	G = 12.07.1914	Cuverville	CG 01002 ; *Journal I*, pp. 807-808 ; BLJD *γ* 32.5 (brouillon très raturé).
12.	G = 10.11.1914	Cuverville	*BAAG*, n° 60, p. 570 ; vente *eBay.fr* (texte complet).
13.	B = 23.11.1914	Paris	BLJD *γ* 32.1.
14.	G = 02.07.1915	Paris	CG 00324.
15.	G = *ca* 18.07.1915	Paris	*BAAG*, n° 60, p. 569.
16.	B = 19.11.1918	Le Véginet	BLJD *γ* 32.2.

Références abrégées :

BAAG : Bulletin des Amis d'André Gide.

BLJD : Bibliothèque littéraire Jacques-Doucet, Paris.

CG : Dossiers de la Correspondance générale d'André Gide, Centre d'Études Gidiennes, Tupin-et-Semons.